

第4回豊田市総合計画審議会 会議録

【日 時】 令和6年1月22日（月）午後3時00分～5時00分

【場 所】 豊田市役所南51会議室（南庁舎5階）

【出席者】

（委 員）

阿垣 剛史	豊田市区長会会長
浅野 智恵美	市民公募
稲垣 令一	豊田市高齢者クラブ連合会会長
大澤 正彦	日本大学文理学部情報科学科准教授 次世代社会研究センター長
大橋 宏	豊田信用金庫理事
加藤 真二	（一社）豊田加茂医師会会長
加納 実久	新とよパークパートナーズ会長 名古屋工業大学研究員
木村 匡子	関西大学社会学部准教授
幸村 的美	（社福）豊田市社会福祉協議会会長
佐伯 英恵	（公財）豊田市国際交流協会理事長
澁澤 寿一	NPO法人共存の森ネットワーク理事長
鈴木 聖人	（一社）豊田青年会議所理事長
永田 祐	同志社大学社会学部教授
中野 貴博	中京大学スポーツ科学部教授
野崎 健太郎	豊田市PTA連絡協議会副会長
畑中 直樹	大阪大学大学院工学研究科招聘教員
弘中 史子	中京大学総合政策学部教授
牧野 篤	東京大学大学院教育学研究科教授
松本 幸正	名城大学理工学部教授
丸井 康弘	市民公募
吉村 一孝	豊田商工会議所専務理事
安田 明弘	豊田市副市長
鈴木 学	豊田市副市長

（計23人）

【欠席者】

（委 員）

大河原 真吾	あいち豊田農業協同組合常務理事
湊 裕	連合愛知豊田地域協議会事務局長

【理事者】

（事務局）	辻 邦恵	（企画政策部長）	都築 和夫	（企画政策副部長）
	阿久津 正典	（企画政策部副参事）		

野依 真人	(企画課長)	花田 潤治	(都市計画課長)
丹羽 広和	(企画課副課長)	大光 圭二	(都市計画課副課長)
		今村 広和	(都市計画課主幹)
宮川 恭子	(企画課担当長)	西岡 雄志	(都市計画課担当長)
古田 祥久	(企画課主査)	加納 崇壮	(都市計画課主査)

【傍聴人】 1名

【議 題】 1 会長あいさつ

2 議題

(1) 【資料①】 計画構成・策定の全体スケジュール (確認)

(2) 【資料②・③】 「ミライ構想 (案) 」について (議論)

(3) 【資料④】 「ミライ実現戦略2030 (案) 」について (議論)

3 その他

今後のスケジュール

・ 第5回 令和6年 5月22日 (水) 14:00～

・ 第6回 令和6年 8月19日 (月) 14:00～

・ 第7回 令和6年10月31日 (木) 14:00～

【議 事】

■ 会長あいさつ

○会長

こんにちは、よろしくお願いします。今日は、お忙しい中、ありがとうございます。

今年辰年、大変な幕開けになりました。1日に能登半島地震が起き、2日には羽田空港の事故が起こりました。犠牲になられた方々のご冥福と被害に遭われた方々の一日も早い日常生活の回復をお祈りしたいと思います。

まだ、全容がわからず、行方不明の方もいます。極端かもしれませんが、これが少子高齢、人口減少社会の形なのかと思わない事ありません。さらに、インフラの問題も出ております。一極集中型のインフラ整備において、一部が寸断されてしまうと、孤立したり、なかなか日常生活に戻れないといった事もあるのではないかと考えます。

今回の第9次豊田市総合計画も、豊田市の新しい将来に向けての羅針盤をつくるという事です。これまで、目標値を設定し、イメージを明確にして達成するためという事をやってきたわけですが、そういう時代ではないのではないか、あるいは先行き不透明な中で、羅針盤として、社会の在り方を考え、一つ一つ前に進んでいくような形で第9次豊田市総合計画が作られると良いと思います。より具体的な議論に入っていきますが、活発な議論をお願いします。

■ 新委員等の紹介 自己紹介

■ 議題（１）計画構成・策定の全体スケジュール（確認）

○事務局 資料①に基づいて説明

■ 意見交換

（会長）

資料①について、ご質問、確認ありますでしょうか。

（A委員）

些細な事ですが、ミライ構想のまちづくりの基本的な考え方、発想の転換と3つの変えるについて、「転換」と「変える」をどう使い分けしているのでしょうか。4つの発想の転換と3つの変えるであるため、合わせて7つ変えるのだろうとも捉えられます。「転換」と「変える」がどう違うのか教えてほしいと思います。また一方で、全体の感想ですが、こんなに美しくまとまるんだな、と感動いたしました。

前回、紙をなくすと言っていて、本当になくなるとは思っていませんでしたが、考えていただいた事に感謝するとともに、私のせいで不便になったと感じられた方など、紙がなくなって不便だと感じた事があれば、責任を持って一緒に改善方法を考えていきたいのでお声かけいただければと思います。

（事務局）

ご意見のとおり「転換」と「変わる」の要素は似ていると思っています。ミライ構想の部分ですが、普遍的な方向性、考え方を示したいという事で、現在の第8次豊田市総合計画と同じ将来像を掲げています。豊田市がまちづくりを進めていく上で、非常に大切にしている、人に関する視点を前面に出したいからです。

発想の転換は、第8次豊田市総合計画を引き継いでおり、その中で、更に意識してほしいところをピックアップして3つの「変える」と表現しています。ピックアップするならば、こういう書き方をした方がいいなどがあれば、是非ご意見をいただければと思っています。

（会長）

他にご意見、ご質問はありますか。

全体としては、第9次豊田市総合計画は羅針盤であり、第8次豊田市総合計画を引き継ぎながら、2050年という遠くを見据え、普遍的な方向性を定めているという事、ミライ実現戦略2030は、それらを実現するために5年間で注力していくものをまとめているという事です。

これについて、いかがでしょうか。先ほどのきれいにまとまっているという発言のとおりでよろしいですか。

全体のスケジュールですが、今後3回の豊田市総合計画審議会があり、途中の過程で中間報告を入れて進めさせていただくという事でよろしいですか。

それでは、資料①については、議論の結果、了解が得られたという事にしたいと思います。

■ 議題（２）「ミライ構想（案）」について

○事務局 資料②③に基づいて説明

■ 意見交換

資料の②と③について、説明がありました。これらについて、委員の皆さんからのご質問、ご意見あればお願いします。

(B委員)

基本的にものづくりという産業構造について、豊田市は変わらないという考え方でしょうか。もしトヨタ自動車が撤退したり、産業が大きく変わったりしたら、対応できない計画書だと思います。例えば、人口について、今は働く場があるから保っているであるとか、働く場がなくなったらどうなるなどは予測できません。今回そういった予測できないミライを使うという事で、産業構造がガラッと変わるという事も踏まえて書いた方が良いと思っています。

(会長)

ご意見として何うという事で良いでしょうか。

背景とも関わってきますが、ものづくりのまちとしてやってきた豊田市が、今後もそのままの構造で行くのか、例えば、ものづくりがガラッと変わった時に、人口など様々な在り方が変わるのではないかと、対応はできるのか、予測はできないが柔軟な計画にするためにはどうしたらいいか、そういうご意見だったと思います。

他にいかがでしょうか。

(C委員)

全体的に今の人口を維持するという前提で書かれているように思いますが、日本全体で人口減少に向かっているという事は、外国人をもっとたくさん入れていく、外国人が住みやすい環境をつくるなど、インパクトのある事をやらないと人口を維持する事はできないのではないかと考えます。という事は、人口を維持するという事自体が、相当インパクトを持った事をやりますよという事でもあると思います。適正人口をどのくらいに設定して、その背景にある理由などバックグラウンドをもう少し説明してもらえないでしょうか。

(事務局)

資料②の4ページに豊田市の将来人口を示していますが、2050年には37万人程度に減少すると推計しています。第8次豊田市総合計画は、2040年で豊田市は42万人にするという目標人口を定めていましたが、第9次豊田市総合計画では目標人口を定めません。日本全体で人口が減少する中で、豊田市の人口が急激に増える事は難しいと考えています。

豊田市は、他都市との人口の取り合いに主眼を置くのではなく、資料②3ページの一番下に少し書いていますが、西三河北部、長野県、岐阜県など、ある程度大きな圏域都市の中心都市であり続けるという目標を持っています。圏域の中では、活力を保ちながら一定水準を維持していきたいと思っています。

(会長)

第9次豊田市総合計画においては、目標人口を定めていないという事と、豊田市単独ではなく、圏域としてなるべく維持できるようにしていきたいという事でした。

他にはいかがでしょうか。

(D委員)

日本全体の人口が減少していくという事と、労働力の不足が顕在化するという事が一つ大きな社会問題だとリクルート総合研究所がテレビで特集を組みました。その中で、2040年になると、必要な労働需要に対して8割しか供給できない、人数にすると1,100万人

不足する社会になっていくと言っています。人口が減る場合、若年層とシニア層が同時に減れば、数字上はバランスが取れますが、実際には世代間で偏りがあります。世代別で80代以上の人が増えていく、率ではなく絶対数として高齢者が増えていきます。逆に労働力を供給する人は、1,100万人減り、必要な労働力の8割しか供給できません。そういった状況でも、社会サービス、公共サービス、競争産業の労働力などを維持していかなければいけません。単純な人口問題ではなく、労働力の需給バランスがひっ迫する中で、今の社会、産業をどう維持していくのかという視点も必要であると思います。

また、サービスを受ける側の方策も視点として持っていないといけません。支援が必要な高齢者が増えていき、お世話をする人が減っていきます。いろんな世代の人、国籍の人、社会の構成員が、何らかの役割や働きに参画しないと維持できないという事だと思います。

(会長)

人口が減るだけではなく構造が変わっていくという事、今の産業構造から考えていくと労働力が圧倒的に足りなくなっていくという事、手当が必要な方が増えていく社会の中で手当する人が減っていくという事でした。

ご意見はありますでしょうか。

(E委員)

今、お話がありましたとおり、人口減少していくといっても、労働人口と比例して減っていくわけではないため、労働力不足が深刻化するという事は、そのとおりのご指摘だと思います。日本は女性や高齢者の労働参加で対応してきましたが、今後いよいよ無理になっていきます。外国人の方を労働力としてどう考えていくかも検討しないといけないと思います。

また、労働力が不足していくという事は、生産性を上げないと維持できません。もっと資本集約的な産業構造に変えていくような支援やAIなどの新しい技術を利用するための支援を押し出していかないといけないかもしれません。

人口の話に戻らせていただくと、資料②の3ページ目の「日本は2016年に人口減少社会に突入しており」と書かれていますが、これはミスですか。日本はもっと前から人口減少していると思います。

(事務局)

日本は2008年ですので訂正します。

(E委員)

それに関連して、資料③の2ページ目、まちづくりの基本的な考え方というところの「人口も経済も右肩上がりから…転換が必要になっています。」のところについて、結論としてはそのとおりであると思いますが、一方で、日本経済について、日本全体の傾向から考えると、失われた10年が20年、30年と経過している中、今の段階で成長社会から成熟社会への転換という表現は、現状認識が遅れているという印象を持ちます。日本は長期に渡って、経済が停滞しており、人口減少も急に始まったわけではなく、既に見えていた事です。

今の学生は、生まれた時から人口は減少し、経済は停滞していたので、日本が右肩上がり成長するイメージは持っていません。そういう人に成長社会から成熟社会への転換という表現はフィットしないと思うので、表現を調整した方が良いと思います。

(会長)

現状認識が古いのではないかと、日本で人口減少が始まって20年になります。デジタルや

人工知能をどう活用するのか、産業構造をどう変化させていくのか、という議論が入っていても良いのではないかという事です。さらに、成長から成熟へという事は言い続けている事であり、昭和を知らない学生もいる中で、バブル崩壊後から何も変わっていない、ずっと昭和が続いているという感覚を持っている学生もたくさんいる中で、現状認識から在り方を考えた方が良いというご発言だったと思います。

他にご意見はありますか。

(F委員)

地域の元々のポテンシャルをどう見るか、例えば環境要因でいうと、水資源など、地域のベースを支えるものから見るという考え方があって、終戦直後、その前後の人口を見てみると豊田市では15万人位でした。豊田市は無理しなくても、そのくらいはポテンシャルを持っているという事です。実は、西宮市も同じくらいの人口で今50万人弱くらいですが、産業が変わったときに、最後に何が人口を支えるかという、まちの魅力だと思います。今回、つながりなどがかなりクローズアップされていますので、いろんな事が起きても対応できるように考えていく必要があると思いました。

(会長)

いろんな条件が終戦直後に戻っていくと考えた場合に、どのように魅力的なまちをつくっていくかという事でした。

他にいかがでしょうか。

(G委員)

資料①ミライ構想を見ていただくと、「将来像」があって、「まちづくりの基本的な考え方」があって、「将来都市構造」があります。いわゆる総合計画の中のフィジカルプランがここに位置付けられています。これは総合計画の典型的な例で、都市計画的なまちづくりの方向性がここに位置付けられます。それが具体的には資料③の3ページ以降に書かれています。コンパクト+ネットワーク、拠点連携型都市、この内容については間違っていないと思います。

しかし、これを考えるときには、中山間地域、市街化調整区域、都市計画区域外を切り捨てるのかと必ず言われます。そういった場合には、議論の中では都市計画区域内の事ですか、中山間地域は拠点を整備していきますというくらいの回答しかしません。農山村、中山間には、都市計画では何もできないからです。

しかし、総合計画でいうともう少し、そこに踏み込んだ書き込みがあっても良いと思います。人口が減って、外国人が入って維持するという場合など、少なくとも都市構造では拠点を集約します。そして、中山間地域でも地域拠点を集約してきます。そうすると、林業や農業、いわゆる山林や農地の保全が可能なのかという大きな心配が出てきますが、そこについて言及が少ないと思っています。将来都市構造で拠点を集めるが、それ以外のところではこういう事をやっていきますというバランスをどうとっていくのか、総合計画では示さないといけませんが、そこが示されていません。自分でも答えは分かりませんが、総合計画には記述が必要であると思っています。

(会長)

都市構造の問題としては、資料に書いてあるとおりであると思いますが、中山間地域など拠点以外の事も書かないのかという事でしたが、いかがでしょうか。

(C委員)

農地林地の保全を優先するのか、農業林業の産業を優先するのかで考え方は大きく変わってくると思います。

豊田市は東海豪雨からの流れであるため、保全を優先して考えるのだと思います。そうすると、その暮らしや自治の目指す方向について、現在の産業中心、効率中心の考え方から変えていかないと地域自治が成り立ちません。私も明確な答えはありませんが、都市部だけの問題では豊田市全体を見られないので、私もその配慮は必要だと思って聞いていました。

(会長)

豊田市の特色、強みとして、都市部だけではなく、広大な山間部を抱えており、都市と農山村の交流や自然豊かなという表現が入っています。都市部だけではなく、中山間、林業や農業の営みをどう書き込んでいくか。人口が減少し、拠点化、集約化する中で、それ以外の部分をどう保全していくかという事が問われているのだと思います。

農学部の方から、ネイチャーポジティブという言い方で、生物多様性を再生していくと言いますか、私達が豊かな里山で暮らせているのは人間の手が入っているからであって、人間の手が入らないと荒れて単調な自然になってしまう、人間が代謝を促す事によって保たれていくという考え方がありますが、この事について従来の農学では人間の関わり方まで議論はしてこなかったという事で、社会教育や教育学と連携が取れないかという議論が出てきています。

人口から入りましたが、農業や林業、いわゆる業、産業の在り方にも関わってきます。都市構造の在り方とも関わります。この辺りについて、もう少しご議論いただけないでしょうか。

(B委員)

極論ですが、もし人がいなくなったら孤立もなくなるので、道路がなくなっても良くなります。都市計画では、そういう発想もあっても良いと思っています。そこまでいけば、資源が足りなくなると思うので、豊田市もインフラ整備をしなくても良くなります。農地山林を守るという事は気持ちの良い意見ですが、それがどこまでできるのでしょうか。人を集約したら、その部分はなくなっても良いという気もしています。

(会長)

農村などを畳んでコンパクト化していくという事でした。能登半島地震で、こども達が疎開しているように、集落全体で移る議論にもなるかもしれません。そういった事を考えても良いのではないかという意見でした。

いかがでしょうか。

(H委員)

貴重な意見を聴かせていただきました。農山村を切り捨てるという極端な話もありました。豊田市の70%の森林を切り捨てるという事はほとんどもない話だと思います。人生100年時代という中で、資料③の3ページ上段で、「行政がリードするまちづくり」から「多様な主体が楽しむまちづくり」へと謳っていますが、このとおりだと思います。市民や民間が、自分達で色々と自由に取り組む事ができるような、まちづくりをしていただきたいと思います。3つの変えるも特に必要であると思います。市民が自分達の事は自分で考えて生活できるという事をしっかりと書いていって欲しいと思います。

(会長)

極論ではあったかもしれませんが、都市が生き残るためにも農山村が必要だという事であったと思います。その中で、共働けるような仕組みの在り方、それぞれが自分の在り方、社会の在り方を見据えていく必要があるという話であったと思います。

オンラインでご参加の弘中先生いかがでしょうか。

(I 委員)

話題は逸れますが、「子ども会議」において、こども達が今後のまちづくりについて意見を出していますが、豊田市をどんなまちにしたいかという問いに対して、やさしいまちという意見がありました。こども達が言う「やさしい」とはどのようなものであるか気になりました。

(会長)

こども達がやさしいと言っているのはどういう事でしょうか。

(事務局)

具体的な内容が手元にありませんが、色々な意味でやさしいと言っています。例えば、学習環境など幅広くやさしいという意見が出ていたと記憶していますが、今この場で答えられないため、後ほど、「子ども会議」の意見を展開したいと思います。

(I 委員)

安心ができるまちというのは具体的でわかりやすかったのですが、やさしいまちが一番であったため、こども達にとってやさしいというのは何なのか、どういうイメージを持っているのかという事が気になりました。

それから、人口減少については、議論が難しく、現時点で方向性を定めるのは、厳しいと思っています。ここに示されているような多様な選択肢を示しておいて、今後市民の方がもう少し時間をかけて決断していくという可能性を残していくことが重要ではないかと考えます。

(会長)

先ほどの「やさしい」について、これまでの議論の状況等が、参考資料1-6の右下にこども達のワークショップの写真が付いており、豊田市がみんなにやさしいまちにしたいというのはどういう事か見る事ができます。これは4班の事しかわかりませんが、あいさつ、一人ひとりを大切に、マナー、もめない、自然にやさしいなどと載っています。これが6班分あるそうです。

一人ひとりが自分の価値をもって生きていけるような事が必要であるという事が言われました。そこに、行政的な手当て、どのような施策を作っていくのか、財政負担をどうしていくのかなどが課題になるかもしれませんが、一人ひとりの価値を大切にしていくという事で総合計画を書いていくものだと思っています。

次に、ミライ実現戦略に移った上で、改めて全体について議論させていただきたいと思えますのでよろしくお願いいたします。

■ 議題(3)「ミライ実現戦略2030(案)」について

○事務局 資料④に基づいて説明

■ 意見交換

(会長)

説明のあったとおり、議論の具体的なイメージとして、ミライ実現戦略2030が書かれているという事です。5年間注力する取組の方向性、人のつながりをどう考えるのか、こども視点を重視しながらこどもから高齢期までの人々の生活の在り方、行動の在り方をどう捉えるのか、さらに、人生100年になった時代に大人達がいきいき暮らす中で、こども達にどうつなげていくのか、まちをどう持続可能にするかという事だと思います。

5つある、取組目標①～⑤、御質問、御意見ありますでしょうか。

(J委員)

資料④-4について、めざす姿が本当に実現したら良いと思います。私は、豊田市に転居する前のまちよりも今の豊田市の方が住みやすいと思っています。資料④-4右側の赤枠内の下から2つ目、「本市は、地域自治システムを通じて地域づくりを進めてきた。しかし、加入率は高いものの、実際に活動を担おうとする人が減少しているため、地縁組織が有するつながりの機能を、どう引き継ぎ、どう変化させるか変化点を迎えている。」の部分について、中山間地域、都市の人含めて高齢化が進んでいます。ニュータウンでも、高齢世帯で組には入っているが自治区の組長は遠慮させて欲しいという人が増えています。加入率は高いが担い手の減少という事について、特に注力する取組だからこそ、担い手の減少は対応すべきだと思います。

(会長)

加入率が高い割に担い手が減っているという事は、全国的な課題でもあります。これについて、どうするかという事がもっと書き込めないかという事だと思いますが、事務局の方からはいかがでしょうか。

(事務局)

地縁組織の強さは、豊田市の今までのまちづくりのベースと認識しています。能登半島地震などを見ても、地縁は大切だと思っています。デジタルを使って仕事を減らしながらという事もあると思いますが、個々の方、地縁組織以外でも活躍している方もおり、そういった方がその特徴を伸ばしていける環境も含めてどうあるべきかという事を受けて設定していますが、どのような施策、事業をしていくかという事はまだ見えていません。5年間、注力していかなければいけない大きな課題だと思っていますので、いろんな案をいただきながら、色々な事をやっていきたいと思っています。

(会長)

こどもが町内会長をやるような事例も出ています。NPO化、ワーカーズコープ化など事業体化して、新しい形で双方支え合ったりしている事例もありますので、そういった検討も必要になるかもしれません。

他にご意見はいかがでしょう。

(K委員)

資料④-4取組目標②について、つながり合いの中で、「こどもが」、となっていたものが、「だれもが」と変わったのは大変良いと思っています。自治区の関係は、自分も役員をやっていますが、みんな65歳まで働く事が当たり前です。65歳を超えてからしか参画されなくなっています。今後70歳まで働くいてからという事になると、地域デビューが遅れ、そ

ういった事も自治区運営の課題になっていると感じます。

中山間地域の人口が減っていく課題に加えて、そういった課題もどうしていくのかと考えると、拠点連携型である程度支えられるとしても、どこかのタイミングで地域が支えられなくなるという事が考えられます。その場合に、どこで、どこまで集約するのかなど、ある程度想定しておかなければ、そうなってからでは上手くいかないと思いますので、地域での拠点をどう考えるか、具体的な事業の中で考えていった方が良いと考えます。

それから、労働力を確保する事と、自治区の運営を担うところが相反するようなところがありますので、そういった事をもう少し具体的に考えていかないと、自治区運営はますます苦しくなると思っています。

(会長)

定年延長等も含め、これまで地域の担い手であった方々が働いている時代に入ります。さらに、労働力不足、人口減少といった中で、特に中山間を中心とした自治区の集約化、拠点形成を含めて議論できないかという事だと思います。

他にご意見はいかがでしょうか。

(L委員)

労働力と地域の担い手の関係が切れています。そんな中でいろんな地域で起きている事は副業だと感じます。現役世代が地域のコミュニケーションに関わっていく事です。

豊田市は現役世代が大勢います。現役世代が、副業という形で地域のコミュニティに関わっていく事が徐々に増えていくと良いと思います。神戸市は、社会貢献をしようと職員の副業をどんどん奨励しています。そういった労働力と地域の担い手をつないでいくという仕掛けも大切だと思います。

(会長)

定年延長を含めてですが、キャリアの在り方も、パラレルキャリア、マルチワーカー、ギグワーカーなど、色々な仕事を一人がやるような時代になってきています。今までは働く場所と日常生活の場が切れていましたが、そこをつなげていくような施策をやるべきという話だったと思います。

他にいかがでしょうか。

(M委員)

気になったところがありまして、資料④－2 取組項目・取組の方向性の背景欄の2番目に「これまで以上に個性豊かな・・・学校教育が応えられていない」という部分について、書いてある事は理解できますが、これを書くと同時に、公的な学校教育が少し薄れているという印象を受けました。共存、連携というような、書き方にしていけないと、山間部など、子どもが減っている中で、色々な機会や経験をしようと思うと、ここに書いてあるキャリアを形成する事は決して簡単ではなく、公的な学校教育が受け皿になりつつ、連携しないと実現しない事が多いような気がしています。そこも書き足した方が良いのではないかと思います。そうしないと、うちは難しくないですか、というイメージを持たれたり、子ども達の目の前にある、1学年1クラスしかないといった現状が置いていかれたりするような感じを受けません。決して、ないがしろにするわけではなく、そこも充実していきますというニュアンスも足していただけると良いと思います。

(事務局)

今回、学校教育との連携も含め、色々な子ども達、どんな子ども達に対しても、望む教育環境があると思っています。少人数学級やフリースクールの話もあり、5年間の重点として、効率的にベースを学ぶ公立学校と特色がある学校をどう分けるかという事でピックアップしましたが、重点化するか、並列に並べるかという表現は検討していきます。フリースクールや小人数学級を希望する子ども達など、色々な選択肢を提供したいというイメージはあります。

(会長)

子どもの学びの機会をどう保障するのかという事と、学びたい事、個性にどう応じるのか、環境をどう生かしていくのか、環境の中でどう学びの機会を保障するのかという事が問われてくるのだと思います。

子ども達のミライを決めていくものとして学びがあるのであれば、それをどう保障していくのかという事が問われてくるのだらうと思います。

それから、事務局から論点提示がありまして、「子どもの生き抜く力、自己肯定感を育むための在り方」、「子ども達が地域を担っていくようになる中で子ども達をどう育てていくのか」という2点について、いかがでしょうか。これらは、人口減少や都市構造にも関わる事だと思いますが、子どもという視点から何か発言ありますでしょうか。

(B委員)

先日、20歳の集いに手伝いに行ってきました。子ども達は、仕事があれば豊田市に住みたいという子がほとんどでした。地元の学校に通って、地元に住みたいと言っているわけです。新しい仕事をつくるという事が資料④-5(1)にあります。ものづくり産業の仕事しか創出されていません。子ども達のミライは働く場所がなければ明るくないので、新しい産業はものづくりだけでなく、違うところはないのかという事も書いてほしいと思います。農地や林業でも良いですし、商業がもう少しどうできるかという事も議論したいです。

(会長)

子ども達のミライを見据えて、多様なものを書けないかという意見だったと思います。N委員いかがでしょうか。

(N委員)

行政がリードするまちづくりから多様なまちづくりという事で、資料④-1でも、取組方針が2つあり、いずれも「ともにつくる」という表現がある事は良いと思います。デジタルを活用するとか、考えを変えるチャレンジするという中で、自分達だけでなく、市からもあるような、双方向のアプローチがあるという寄り添うイメージが良いなと思って聞いていました。市外に住む人と山間部に住む人によって、使う情報源、ツールが異なるため、従来の延長線なのか、新しいものをつくるのかなど、あらゆる選択肢を検討いただいて、提供してほしいと思います。

また、子どもについて、何が自分の成長につながるか、他者とつながって何ができるのか、自分だけでは考えが限られているため、具体的に何ができるかという情報も提供してあげると、子ども達に実感が湧いて、子どもが主体となって次のステップに移っていくと思っています。

(会長)

戦略は「ともに」が良いんじゃないか、また、子ども達も主役になっていくという事、こ

どもが肯定的に自分の人生を設計していく力をつけていく、そういった関係を持っていくような、そういった事が良いのではないかという事でした。

O委員いかがでしょうか。

(O委員)

地域共生社会推進全国サミットの中で敷島の家の方が登壇されていた事が印象に残っているのですが、敷島の家でこども達の意見を聴いたら、「いろいろ聞くけど、結局大人が決めるでしょ。」「こんな地域に自分は戻りたいと思わない。」という率直な意見があったそうで、大人もこども達の意見を聞く事に本気になって取り組んだと言っていた事が印象に残っています。サミットの当日も中学生の発表がありましたが、大人がこどもを本気で信じて、ちゃんとその声を聞いてやっていく事をしないと、こどものために、と書くだけでなく、こどもの声を聞くという事を本気でやるという事を書いてもいいと思います。アドボカシーというが、声を聞いて、受け止めて、実現していくというニュアンスを持つと良い。

それから、コンパクトシティ、効率化と言われる流れですが、能登半島地震では、厳しい集落でもここに帰りた、ここで暮らしていきたいという事を言う方もいます。人間は効率性だけで生きているものではないと思いますので、そういう声も聴いていただけると良いと思います。

(会長)

こども達という事であれば、声をちゃんと聞いて、ちゃんと受け止めて、ともに一緒にやっていくようなこどもの受け止め方、主人公にしていくような書き方が大切なのではないかという事でした。また、一人ひとりの思いや価値、いわゆる尊厳を大事にしながらどのような都市構造を考えたら良いかという事だと思います。

P委員、一言何かありませんでしょうか。

(P委員)

つながるという単語を見すぎて、つながるって何だっけと迷子になっています。4回の会議を経て、この場でもバックグラウンド含め、つながりというものを感じるようになっていますが、もう少しつながりとは何かという事を掘り下げていかないと、町内会に入っているから良いか、という事にならないか不安に思います。取組項目や方向性においても、こういうつながりが生まれる事で、こういう風にまちや暮らしが良くなるという事を、一言でつながりでは雑というか、もったいないと思います。

つながる、とは何でしょうか。別途、話の場が持てたら嬉しいです。

昨年、結婚した人の出会いの場のうち1/4がマッチングアプリであった事ですが、つながりは自治体の範囲内での物理的なものだけではありません。市として、どんな事があつたらつながりやすいのか、災害時に人が見える環境づくりなどにも考えを及ぼさなければなりません。

また、逆に情報はどうやったら手に入れられるのか、情報発信について、まちなかで活動していると、「知ってたら行ったのに」とか「あそこで何をやっているかわからなかった」というお声をいただいたりしました。受け取り側が主体的にその情報を自ら掴もうとする機運づくりというところも、何かしたいし、アイデアがあれば盛り込んでいきたいと考えています。

資料③の3ページの「行政がリードするまちづくり」という単語が良いのかどうか悩んで

います。行政がリードするという事が市民には安心感を与えていたというか、それを急にみんなで作るとするのは、突き放された感じがあるかもしれないので、リードという言葉以外の言葉が思いつくと良いかとも思います。

(会長)

具体的につながるといふ事について手がかりが深められないか。つながりを通して、こういう社会が出来てくるという事が言えると良いという意見だったと思います。また、行政リードなのか、行政お任せだったのではないか、その辺りの書きぶりを、という事だと思いません。

(G委員)

今の人達は、面倒くさいからつながりたくないという人もいます。学生も友達が欲しい、でも自分からアクションは起こしません。そこで、何をやるかという、研修旅行に連れて行ってグループディスカッションをします。そうするとそこでつながりができ、友達ができて良かったという事になります。

つまり、住民のみなさんに、ではつながってくださいと言っても、普通の人は面倒くさいなと思います。例えば、みんなで草刈りなどをして、そこで隣近所とつながるなど、マストをつくってあげないといけません。ということは、交通はすごく重要です。幹線道路は市が作っていますが、作った後の事は書かれていません。今求められているのは共創です。住民で考えて、必要なものをつくり、かつ、それを可能にする法体系ができています。困っている人達で寄合ができて、つながっていきます。そうすると、どこにおじいちゃんがいる、ここにこどもがいるが父母が働いていて動けないなどがわかっていくわけです。そして、何が必要であるかがわかって、それをつくり上げていく仕組みを今豊田市がつくっていると思います。

結論的に言うと、資料④-6に書いてあります、「安定的かつ効率的な移動・情報通信環境の確保」これは市が行うだけではなく、住民が共同で作り上げていくというような事を書いてもらっても良いと思います。地域交通計画にもそういう位置付けもあるので、整合性は取れています。住民の方にやってもらうんだ、住民の方が実現できるんだという事を入れてもらえると、地域の人もつながりもできるはずですよ。また、お祭りなど、楽しみでのつながりもあると思います。

それから、資料④-6「適正な土地利用の推進」というところ、この部分で中山間、山村、農地の保全という事を言っていると思います。土地利用的な記載はこれで良いと思いますが、これをどう守るのか、実際にどうやるのか。資料④-5「新規事業や展開や、新製品開発へのチャレンジの促進」のところ、新事業が何を指しているのかはわからないが、既存の産業である農業や林業にも触れるようなわかりやすい記載があると、先ほどの資料④-6「適正な土地利用の推進」にもつながっていくと思います。

あと1点、変だなと思ったところです。資料④-3「こどもが多様な生き方・暮らし方を選択できるまち」の「クルマの魅力を身近に感じられる機会の充実」というところについて、「FIA世界ラリー選手権日本大会開催の契機を生かし、「クルマのまち」のアイデンティティづくり」を入れたい気持ちはわかりますが、これだけ浮いて見える。これはシティプロモーションの方に入れば済むのではないのでしょうか。すごく違和感を持ちました。重要である事は理解した上で、ここにまで入れる必要があるかなと感じました。

(会長)

つながりをつくるような仕組みをつくる事で、様々な今後の構想、ミライ実現戦略に関わって、実現していく方向になるのではないかなというようにご意見でした。

Q委員いかがでしょうか。

(Q委員)

先日、外国人集住都市会議に参加しました。人口減少と外国人の関係が主要テーマでした。基調講演の先生の言葉ですが、「外国人との共生に止まらず、地域をともにつくっていく主体として考える」という考え方は。これまで、集住という感覚でいる市民が多いのではないかと思います。今後、人口減少に当たって、地域の町内会などの組の中で、そういう方も仲間の一人として捉え、地域の町内会を担う人の一人として捉えないといけないという事です。皆さんの議論の中でも、人口減少の中で外国人は当然にして担い手として増えていくという想像の世界があると思います。外国人集住都市会議でも、「日本は他の都市との競争の中にあり、必ずしも外国人が日本に来てくれる保証はない、ずっと住みたいと思えるような場所をつくっていかないと外国人が来てくれない」という中で、外国人にどうやって人口減少を支えてもらうのだろうかという事を感じました。

昨日、外国人の意見を聴く会をやって参加しました。本当に豊田市が大好きで、死ぬまで豊田市に住みたいという覚悟を持っている人達があります。その人達は、自分のお墓をどうしようという事まで考えているのです。今は労働力としての視点があると思いますが、本当に日本に来て担ってもらいたいとすれば、その人達の人生を背負っている事になります。だからこそ、行政も覚悟を持って受け入れる体制づくりが必要であると感じました。

(牧野会長)

外国人は住民であり、一緒につくっていくという考え方を大切にする必要がある、そうしなければ、労働力を担うという事も難しくなっていくという事、そのための行政の在り方も検討していく必要があるという意見でした。

R委員、いかがでしょうか。

(R委員)

資料がきちっとできていますが、実現していく具体策が見えていないと感じます。先ほど、5年計画という話がありましたが、都市構造としては、豊田市というのは面積も広いので、衛星的なまちをもっとつくり、そこへ交通を発達させる事で、中心部だけが良いのではなく、市の中のそれぞれのまちが力をつけていくという発想に変えていかなければいけません。豊田市はインターが7つあります。そして、商業が弱いという話もありました。アパレルや食事などは岡崎や名古屋に出ていきます。これだけあるインターチェンジ、トヨタ自動車の社宅だけでなく、郊外型の商業施設をつくる事がまちの魅力につながるのではないかと思います。県外から集める方法として、大型商業施設をつくるという事を考えていました。

住民の方がこのまちに住んで本当に良かったと思ってもらうには、地域の底力が無いと無理だと思います。高齢者クラブが地域を回ると色々な話をしますが、地縁型組織という事で、高齢者クラブ、自治区、婦人会、子ども会はこうやるという発想は消えると思います。地域の活力が無くなるという事は過疎化です。それが進んでいます。

また、コロナ以降、元気が無いという事を心配しています。自治区として、それぞれ活動していますが、その中身は、高齢者、福祉、その他コミュニティで同じような事をバラバラ

でやっていますが、これからは地域でまとめて、隣の地域にも影響を及ぼすという事を考えていくともっと楽しく活動できるのではないのでしょうか。幸福寿命を延ばそうと思うと、介護、病院が入っているまちづくりをしていかななくてははいけません。それは市の責務ですが、それを地域でも活動して、幸せだったと言えるようになれば、それはすごいまちです。そういった発想で、5年間の計画であれば、もっと具体的なものが見えても良いと思います。

自分が楽しむだけの、それだけのために活動しているわけではありません。地域の高齢者のために、こどもの関わりなども考えています。しかし、それらを単位単位で考えていては弱いです。だからこそ、地縁型で、共働でやっていき、そこに市が協力していく、そういう発想があれば楽しい幸福寿命を送っていけると思います。

(会長)

都市の構造の在り方について、豊田市単体ではなく、周りとの関わりの中で豊田市をどうしていくのか、地域、自治区町内会の在り方について、年齢割、横割り、縦割りではなく、全体として、生きる人が魅力を感じるような都市の在り方を考えられないか、そして、それを行政が支えていく、そういうつくり方ができないかという意見でした。

S委員、いかがでしょうか。

(S委員)

実際、人口減少の中でつながりが大切だと感じます。年齢を超えたつながりをつくっていくと思うと、義務教育の中でつながりを取り入れながら価値観をつくっていくという事が大切であると思いました。地域共生社会推進全国サミットに参加した時に、松戸市の川添先生が、義務教育に命の授業を組み入れて、小学校中学校の子ども達が命やつながりの大切さを授業で聞いて大人になっていく、さらに、その子達が親に命やつながりの大切さを伝えていく事で、たくさんの人に伝わっていくと言っていました。

そういった価値観をつくっていく段階でつながりが大事だという事を言っている。それとともに製造業だけでなく、商業やサービス業、介護、福祉の魅力も伝えていけると、高齢社会になった時に、つながる事に魅力があるんだ、という事が見えてきます。元気なうちにつながりをつくれる事が大事。義務教育のタイミングから価値観をつくっていくと良いかと思いました。

(会長)

義務教育の時代に価値観を形成していく、その中で産業の在り方、高齢者の関わり方を学び、その子ども達が社会を担っていくような社会の基盤をつくっていく必要があるという意見でした。

T委員、いかがでしょうか。

(T委員)

つながりという事に対して、私も地域の課題解決のためにつながりをつくるという活動をしています。その中で、つながりが大事というのは誰もが知っていますが、では何をしたら良いのかという事が、こういう資料にあまり書いていない事が多いと感じます。私達が活動する中でわかってきた事として、強引につなげないと、誰も積極的ではありません。コロナで分断が支配してきており、つながりをつくると言ってもなかなかつながらないのです。だから、つなぎ役の人が必要です。うまくいっているところはつなぎ役の人がいます。つなげるのが得意な人、つなぎ役の人をいかにたくさんつくっていくかという事もつながりを機能

させるコツだと思っています。この資料の中でも、つなぎ役の人というキーワードを使って
いってほしいです。

(会長)

つながりと言っても皆さん控えめでしょうし、面倒くさい事もあり、なかなかつながら
ないだろうという事、つないでいく役、社会教育でもつなぎ役をつくる、担うという事が大切
とされているという意見でした。

最後になりますが、U委員いかがでしょうか。

(U委員)

少し、資料で気になったところがありまして、資料④-7「脱炭素社会の実現に挑戦する
まち」、この項目は良いのですが、取組目標、取組の方向性の背景の2つ目、「自動車産業
界に対して、・・・要請が強まっている。」という事について、大手企業など一部企業のみ
の取組に止まっており、我々も後押しを検討しています。これはそのとおりですが、最後の
部分の「主体的に取り組む事業者に対する支援が必要である。」という書き方について、い
わゆる、ティア1、ティア1.5の会員はやっていけると思いますが、部品1個作るのにど
れだけCO2が出るのかわかっていないと仕事がもらえない時代が来る事を想定し、全ての
事業者を引っ張っていく必要があると思います。つまりは、主体的に取り組む事業者よりは、
置いていかれる中小零細をどうサポートしていくのか、取り残されないように全てのサプラ
イヤーに取り組んでもらうというような書き方が良いと感じます。

(会長)

カーボンニュートラルについて、全ての事業者への支援に書き方を変えられないかという
意見でした。

論点のもう一つ、少子化対策の在り方について、議論いただいた事が実現していけば、こ
どもを産みたい社会になるのではないかと思います。

それから、つながりを強調するだけでなく、つながらざるを得なくなる、強要するとい
うか、つながってみたい仕組みづくりも必要ではないかという意見もありました。昨年11月
の日米独の意識調査において、日本は社会に信頼を置いていない、地域、家族にも信頼を置
いていないなどという結果が出ています。しかし、孤立しているかと思って聞くと、孤独で
はないと答えます。もしかしたら、日本の回答者は他人のいない生活をしているのではない
か、社会に生きていない事になってしまっているのではないか。では、どこに行っているの
か、SNSかもしれないし、つながっていないなくても平気なのかもしれない、この人達に情報
発信しても届きません。今後は、つながらざるを得ない、またはつながりたいと思うような
手当が必要かもしれないと思いました。

この後、3回ほど審議会がありますので、引き続き議論をしていきたいと思ひます。

○事務局

■ 企画政策部長あいさつ

■ 事務局連絡

○事務局 次回審議会日程

: 令和6年5月22日開催

(終了 午後5時05分)